



【巻頭言】 高度な専門的教養と洗練された臨床的実践力

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学大学院教育学研究科学学校臨床心理専攻 公開日: 2017-08-01 キーワード: 作成者: 庄井, 良信 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00009412

【巻 頭 言】

高度な専門的教養と洗練された臨床的実践力

庄 井 良 信

(学校臨床心理専攻教授・専攻長)

1. 多領域横断の研究環境

北海道教育大学大学院・教育学研究科の学校臨床心理専攻は、学部を持たない独立専攻として、2002（平成14）年4月に設立された。創設以来、本専攻では、教育、心理、福祉等の多様な専門性を持つ大学教員スタッフが協働し、大学院学生の人間発達援助に関する高度な専門性と臨床的実践力を開発してきた。そのために、大学教員スタッフどうしもまた、専門領域の多様性を超えて学び合う環境を大切にしてきた。

本専攻では、研究職にある大学教員も、学習者である大学院学生（院生）も、教育の現場や人間発達援助の実践に何らかの形で参画している。大学教員も院生も、その経験が浅いか深いかにかかわらず、人生という臨床の現場で生成しつつある問いを1つの重要な契機として、みずからの研究活動を設計している。こうした活動の動機に基づいて、大学教員と院生が、ピアな対話を重ねつつ、院生は、独創的な研究テーマを絞り込み、研究論文の構想と執筆に従事している。

また、本専攻では、教育、心理、福祉等の専門領域におけるキャリアの多様性、教育職（援助職）としての経験年数の多様性、教える者と学ぶ者との相対的立場における多様性を尊重し合い、あえてその差異を活用できるような学習環境を構築してきた。それは、特論、演習、実地研究、実習、課題研究（修士論文指導）における学び合いの過程を貫く重要なカリキュラム・ポリシーの1つでもあった。

2. 実存的な研究動機との接触

本専攻の教育カリキュラムには2つの潜在的な基準線がある。1つは、自己が参与・参加した臨床事例や実践記録（主として逸話や談話の記録等）を協働的に省察する事例検討型／カンファレンス型のカリキュラムという基準線である。もう1つは、人間発達援助に関する一般理論（主としてその原典や翻訳されたテキスト等）を協働的に読解し、その心理学的・教育学的な意味内容を解釈し合う理論学習型／テキストクリティーク型のカリキュラムという基準線である。

概念形成の論理でいえば、前者は、具体から一般へのアプローチであり、後者は、一般から具体へのアプローチである。前者は、臨床心理実習、臨床心理基礎実習、学校カウンセリング実地研究等の実習系の授業、あるいは、学校心理学特別演習、臨床生徒指導特別演習、特別支援教育コーデ

イネーター実践演習等の演習系の授業が重視しているアプローチである。後者は、学校臨床心理学特論、臨床心理学特論、学校教育内容方法特論、臨床生徒指導特論、発達心理学特論、教育心理学特論等の理論系の授業が重視しているアプローチである。もちろん、前者には、具体を一般化する際の臨場的な省察の留意点があり、後者にも一般理論を具体化する際に陥ってはならない学理上の留意点がある。

これらの問いを絶えず検討しながら、本専攻は、人間発達援助に関する高度な専門的教養と洗練された臨床的実践力を形成するための教育カリキュラムの改善に取り組んでいる。

3. リサーチベースの修士論文への支援

上記の2つのアプローチを基盤として、高度な専門的教養と臨床的実践力を形成するために、本専攻では、リサーチベースの論文指導（院生の研究活動を基盤とした修士論文の指導）を一貫して重視してきた。その際、本専攻の専任教員は、主に次の3つの支援を大切にしてきた。

- ① 修士論文の研究指導にあたる大学教員は、ある院生が関心を抱いた（その院生の自己感覚に触れた）理論・概念が、その院生にとってなぜ意味あるものだと感じられたのか、という問いについて自己吟味できるように支援すること。
- ② ある院生が、ある理論・概念に関心を持ったときは、その理論・概念を生み出した先人たちの知的探索のプロセスを、歴史的事実と共に追体験できるように支援し、その理論・概念の社会的価値について、冷静に客観視できるように支援すること。
- ③ その上で、その学術的概念を、教育現場における具体的な実践事例として、自分の実践（あるいは自分が参与観察した実践）で例証しながら、その概念の臨床的意味について再検討できるように支援すること。

これら3つの支援が繰り返されるなかで、その院生が問うべき問いの糸口が仄見えることがある。また、ある概念で、今日の教育現場における一回性の実践事例そのものを再解釈することを通して、既成の概念そのものを、その院生みずからが理論的に再構築する瞬間もある。そこではじめて、学習者としての院生は、自己をかけがえのない存在（un être irremplaçable）として自認し、真の意味で、協働的な知的活動の主体となることができる。このような一連の学びの軌跡を経験した本専攻の修了生は、すでに200名を超えている。

心理学においても、教育学においても、高度な専門的教養を臨床的実践力に結実していくためには、子どもの総体としての生活を、社会学的、心理学的、生物学的な知識を持って、ときに人類学や病理学の叢智も反映させながら、哲学的に分析・総合し、それを教育実践に結実するという一連の知的活動が求められる。本専攻の大学教員には、そうした活動に相応しい学習内容と学習方法の絶えざる自己検証が求められている。

本専攻は、来春には設立15年目という節目を迎える。ここに今年も1冊の研究紀要をまとめることができた。これも本専攻への皆さまのご理解とご支援の賜物と、心から感謝したい。ご一読いただき、ご批正・ご教示いただければ幸いです。